

中村俊定
 柳
 治
 寛

中村俊定文庫
 文庫 18
 918



只作けき廣かりの御代也

全

繁樹

只く多し世をの感りも如く勢

全

千九

墨水く松小優美也都也

全

真楫

千代経登き碑銘自然也松の色

全

葉仙

年老く地如來形りの松く雅致

全

小葉

赤もつきの松も枝の數十本

全

玄秀

水谷久藏

夜十里

空

廿二林



圖書
藏書



六世川柳編

志計理柳 完

水谷氏藏



人生如夢



今歡

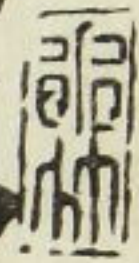


故六世宗匠壽碑建築ノ餘慶ニ四方
ノ各位ニ玉吟ヲ乞ヒテ繁リ柳一卷
ヲ編集セラレ該製本ヲ余ニ委任ス
爾ルニ豈圖ランヤ着手未タ半途ニ
シテ黃泉ニ趣カレントハ殆ト遺憾
極マル今更茲ニ落成スト雖モ假令
ハ彼ノ劍ヲ墳墓ニ掲タル後悔臍ヲ
敲ムトモ不及慨歎骨髓ニ徹シ哭泣
双袖ヲ漫セリ剩ヘ先師歿後雅俗ノ所
務我一己ニ負擔シ草稿印刷ノ校正不
逮ナレハ必スシモ誤謬アラソ庶幾
ハ粗懶ノ罪ヲ仁恕アリテ亡靈ニ捨
香ニ換ヘ刷費ヲ喜捨シ給ハン事ヲ

七世川柳謹誌



存志於百年之後者
書也傳志於百載之
後者碑也六世川柳
翁建書可碑于墨壘塔
其徒之三老菟翰社友



之六詠也而上梓行同志
蓋以二舉俱彰志於
亦遠羽翼贊文以之
事而又風教之一端也
也槐山人





此處の山田や野原の里出て板敷の
程句一流時代より傳へられしより今
の世とちなるまぬ世を傳へ人の勤め
も強く馬場三圃の社説なる先代
の碑より双へて同一の一日の暮の暮の碑
を建てる如ぬ然るは或人家の世業以
多く善く極家をも那よ忠の世

従ふをさめくや一石の法を
あり傳世碑の句をばらしこのん
かゝるて思ふ心と一之をえの世み
を解しつ稍家お業へつる事
よしなる世の世傳へしも知て
よき世の世の世も知くも
告らるし一より其世をさめ句を

句一萬名と云

曆措く柳樽の出版茲に始る

遂に柳風一派を組織し

川柳狂句の名称を起させし基礎あり茲に年何里

寛政二戌年九月廿三日卒す

齡七十二新堀端龍寶寺に葬

因て長男

幸孝氏を奉りて云々山柳とす

在世柳稿四十篇より六十篇を判り

文化年間歿す其舎弟八蔵氏を奉りて三世川柳

とす事故有く社中より判断を拒絶し社貞

風操庵賤丸氏を奉りて假判をとり

茲に原俳諧者流よりて文日

堂磔川氏有り子六狂句の道を裨補を以恰も湯武の伊國に於る如く頗る名誉有る在在世俳諧鏝百篇の輯録有り

同七年二月三日三世より賤丸氏より点式を譲りて再

奉りて世とす人見氏山柳と云々氏に都鄙之望

あり天保三年深川より成岡山開扉りて一社

奉願の企をなす

干時樂評五十名集句三萬三千餘吟

同七年中幕臣より

て其頃進任せらるるは固り雅名録亭個氏より点式を譲る。の世間を憚り宗匠の任を解く

五世山柳水谷氏より其名望元祖より次第

回の盛會有り就中同十年祖翁五年回忌の追薦を

嘗て志集句二萬八千餘於又寛政五年同七十回忌の催しより

志評者六十三名内百番以上の出景二十八名有り集句三萬八千六百餘吟なり旅會開遊三晝夜に渉る斯る盛會の謂

はも同氏の得意となす所從前の卑言下女居候類ひ八關

とも其品物を二變一滑稽海の底も和漢の故事を
係け悟教の道を旨として撰筆せられ一効験と
言ふべきは同年八月齡七十一歳を没す同翁著述の書
俳諧問答。
親鸞上人一代記。百人一首の類ハ。秀雅。英勇。烈女。奇特。
義烈。贈答。畸人。俳人。各頭ハ略傳を記す其他の小説釋史許
多編輯仍て翁の長男小島氏を承て。六世とす則規
在和風亭山柳之なり子も又先代より名頗る名
望あり維新以來一變して開化の新調を専利せ
し處は道自然文剛に進歩して其の新芽日よ
自ら繁殖し各地判を乞ふを机上に充滿す亦

業をとも増つて一り一は這面企の原因たる也世の流
念碑後前府の築地本願寺境内に安在せり其
官田知となり一政客のちのちを提三國社の人
多轉を其序を以て初六世の嘉碑を双入連深
の成功際社中にも相次て撰筆其祝詞と各自
の持向を不備三名の角よ其佳吟一章を撰筆
し之を以て釋し其よ永く業を其遺行にたむむ
此由社中一重書きしよ目ら其考集す。二百餘名
終其國多員と雖も言所本名は詳細なふ決或い

医致は通河の普く満員を待んとせよ製本完全
 の期後せん事を忘る依て漢編の方い本輯北匿號
 り載ん蓋平本會は物より軟裡弱と降の履歴を岸
 り其より柳風代は世を共に其二より舊
 本の安件する有も組織は経験を保持して之より
 此き節の句作の便利と教養を著述して以て品行と
 精神とを愛せしむるに其の心を謝し其功故を
 記して方々の名位を廣く告んとすふ有り候て本會
 繁る柳の府とすすとも有り
 本會 幹事謹誌

あく孝子素碑も親の傍者なり 西京 柳好
 建華の雅々一對乃根源石 全 二 柳
 母の時遠へ次は森 子 推 全 笠 奥
 嘆香のゆりも次は竹付風 全 柳 曲
 柳伸ひる時ぞ城へ招く風 大板 古船更 蟹 丸
 美中の美陽田のちよから夕波 全 山 橋

百事一只柳之文之書を楚し
越後新發田
道 旌

天晴花の大如如體州
全 嘉 耕

十日の雨は多し何れも
全 白 齋 爺

糖乃糖の雨多き地も碑を照し
全 龜 九

柳風は姿若子ハ之ハ宛理
全 真 直

鶴長昔英味食はるも後八分
伊豆 石 九

作切も君子の徳也持扇
土佐子知村
筆 山

おはしハいあまりまきまぬ尚齒舎
お操屋本
介

長生も恥多し次賀の祝心
全 角 大 星

碑と跡す言葉の重也橋益
全

慈悲の種蒔り了実の如く地ハ也
全 善 心

契の客ハ次跡蒼海のさき是
全 三 扇

深の歩く如く糖を塊は老柳

少年 柳 糖

仁ハ智は元水添多山二つり

甲府 如那如

非成成身也流ん忘是川

全

懐思は誠合岸抄の枝柳

全 三ツ輪

来ハ密思くゆくも路ハ志

全

形起乃愉快也梅は妙る月

全

三丈婦の間毎く画く雲月花

全 鏡 成

業は行極流きて福聚海

全 實 り

了家乃喉と百多於下契振舞

全 子 種

老世如毒柳ハ子世の苦は花

全 善 丸

去る皴も女くハ延き契は庭

全 和 泉

真ふ吾目一茶の香ハ並所

甲州日川 素 拾

理より程成り世端より引志端
 一年ハ一ッ考りし世乃春
 若行ハ出子成る次第ハ水
 信みハ只外ハ世ハ親ハ志似
 草先也考りし心ハ弱返
 米祝ハ若考り成る味ハ
 左 左 左 左 左 左
 世 花 弱 文 柳 乐
 寓 拈 品 楊 志 調

人言我知りし才ハ丸ノ字
 只愛セ家ハ魔除キ箱籠
 若く代涼ハ行志成英酒健者
 楽ハ一ッの若知心ハ柳ハ樹
 春盤乃酒ハ浪多取春ハ海
 板穴ノ道ハ開化を為る智恵
 左 左 左 武八王子 左
 水 春 一 笑 後 早
 玉 膏 樹 知 漸 喜

柳	之	知	遠	張	の	ま	か	の	性	根
左		左		左		左		左		左
三	知	大	生	於	雅	奴	夢	九		
左		左		左		左		左		左
疾	如	影	成	流	の	垂	し	る	初	の
左		左		左		左		左		左
此	く	善	小	親	の	吳	已	也	多	苦
左		左		左		左		左		左
水	く	せ	ぬ	若	老	酒	乃	養	老	酒
左		左		左		左		左		左
百	福	の	是	楚	長	か	り	る	楚	振
左		左		左		左		左		左
音	空	也	小	多	八	親	の	餌	捕	へ
左		左		左		左		左		左

来	年	の	聖	く	極	付	の	餅	の	苗
左		左		左		左		左		左
綿	若	ぬ	心	災	く	一	反	哺	鳥	
左		左		左		左		左		左
木	枯	し	八	昨	日	の	夢	也	よ	み
左		左		左		左		左		左
人	く	あ	り	人	の	菜	八	人	乃	中
左		左		左		左		左		左
流	の	髪	さ	深	き	柳	く	月	の	櫛
左		左		左		左		左		左
松	を	ら	ん	よ	花	美	八	い	く	木
左		左		左		左		左		左

法徳の梅とやうき系柳 左 左 籠
 花よりも羨くし赤内塔柳 表深き山 歩 月
 実生松神上りも只志のけ 左 香 久 長
 子代葉小柳の面也碑のみ 左 急 雨
 枯木何れもも花枝を春のほほ 左 永 樹
 靉の空を極く極はる罪やう 左 貞 於 良

年毎々三巡り 一歩一雪月花 左 其 成
 春をのぞく徳を積込契の道 左 木 蔭
 志趣不遠をこそ行枯時系 左 轟 良 久
 ふり笑くも齡ひゆ延る喜 鹿 左 野 梅
 古子ゆ揺曲る糸鬘長命寺 左 久 保 見
 花も忘まき花も忘れり 左古川 花 月

只仰け青原かりの御代也	左	繁
英く多中をゆ感るも如く勢	左	千九
墨水く松小優美也都也	左	真楫
千代経登き碑銘自然也松の色	左	兼仙
年老く堪出未形りの松と雅致	左	小兼
赤もつきの松も枝の数十本	左	玄秀

浪静く美もより来り福袋海	左	兼醉
吹流の石(如か)か親の恩	左	三ノ星
梅並つる柳也隅田の水鏡	左	田民
在るも思ふも一挽の兼がり	左	深海英
蝶乃在床の雲の野は青も	左	三羽
積石の解度也社地の石明り	上左	成之

招の来く翠りりや	此柳落	左	阿豆麻
枝たれく砂一赤乃字を	如く柳	左	玉柳
代ハ世病老健康の契の祝	心	左	柳心
二夕親の笑顔や赤の月也花	山	左	山ハ
御黄屋年を宜稱す身の果報	花	左	花蝶
並ハ輝ハ柳の葉も柳の枝	如	左	如柳

赤く皺解り物々も赤は果報	左	早苗
支親も赤お生りの松ハ物	左	傍英
壽終碑を建てし御社ハ糖を造し	左	完倉
赤もたれ美世調む期の子幾柳	左	百仙
大根く赤も白髪ハ為齒倉	左	出藻
強きも弱國も之ハ只共和	左	素文

聖人_{全牛久}の情_無が欲あり我活名
 磨け只才の内_無の如_無意宝珠
 時多_左の晴_左形もあ_左る千松島
 蟻_{左相と}神への_左た_左走_左る吸_左の葉_左の酒
 吹拂_{左平}の柳_左の_左庭_左の蟬_左の意_左地
 羨_{左船尾}しく年_左の_左去_左た_左き_左勝_左海_左老
 松_{左牛久} 步
 東_無 祝
 魯_左 山
 毛_{左相と} 桃
 玉_{左平} 光
 金_{左船尾} 笑

此やうく人の_左魂_左も似_左よ_左麻_左の_左丈_左ケ
 涼_左の_左揺_左る_左柳_左の_左蔭_左ゆ_左つ_左ふ_左き_左船
 橋_左の_左つ_左ら_左ぬ_左老_左此_左葉_左子_左履
 曲_{左平}の_左舞_左を_左ま_左垂_左し_左神_左 宿
 何_左所_左か_左く_左の_左極_左め_左も_左か_左ら_左ん_左が_左を_左の_左客
 花_左の_左つ_左ら_左ぬ_左風_左も_左り_左く_左あ_左る_左系_左柳
 金_左 風
 為_{左西} 玉
 東_左 精
 東_{左平} 光
 若_左 泉
 東_左 嶺

持たきハ柳のやうに艶心 全湯元 静糸
 米ちり命毛長き 無蔵川 鬼関
 怖じ世やまの八宗智々自器撤 左 猫助
 嬉しき怖ま山中へ人の夢 左合左 东水
 追々勢を狐位社内透り 左赤利 东止
 ふりあふ邪魔もふらふ松餅 左平 东河

梅々香成我りの影乃西隣 左 鲁桂
 川水く至る心さうり 左 有之
 牛島へ閑居ハ家も力 左 磐林
 信り物々 左 招人
 来く途我 全等白 賀續
 婦 羽衣米次 起峯

雲と空一色松より香ハ柳

全栗川

杜鵑

憶忍を根と一葉ハ瓦石軒

全芳米屋

故丘

夕夕と視ハ了此ハ旭ハ杖

全窪田

松月

六十路越也七十路テ松ハ色

全

友山

山ハ多士水ハ谷川身ハ柳

全

茶田

如く那風吹来り世乃考

全源野目

世箱

琢磨より如玉も及ぬ人心

全

羽織

月ハ開化ト羨トき世ハ以代

全荒戸

卜枝

垂汁の鮎ハ己限了盆水

全

秀雅

御製よりれりるる銀也尾燵

全

一声

糖の徳ささく塵躰と地建碑

全小港

精匠

懶夷すくも膝む身ハ柳ハ和

全有後院

里川

年自懐上座を去る為齒會
全深沼 幸 正
 柳風を為碑輝く春福の賀
羽前果原下玉柳 義 旭
羽前窪田村 法 光
 親類を答ひ夢す賀振舞
仙臺 貞 新
 九く成るも行心不和の一字
全 おれのみ
 太平海へ新造の指切の紙
左 花 兒
 乳あるをりつるそま猫の皮

亂ふせむ器械や汗ま初様
全 孤 柳
 暑ひ事九千方の汗を重の峯
紀伊長島浦 赤 柳
 儀編む葉を繁結入十八
全 招 水
横濱 六 石
 前九年赤夷をくさる磨
全 小 圃
 言忠乃實理琴柱を繆せ次
全 楊 垂
 親く若茂柳ぬの者の百分一

昔の書乃石二く名譽の言の宗
 其のし謝せ父母の暇あん後敷
 雪くちる墓より父碑へ流し後碑
 其のしあく老もあやぐ花毛厚布
 此の垢も流く万年青も垢を脱
 轉ぶまて安んよ隅田の花吹雪

全

李友
 梅子
 半醉
 約の家
 五連
 夕太
 東海

磨け只友ハ睦く其乃米
 世く共く業への世量も昔の伴
 清枝也老も花吹くハまの梅
 ありくし暇く己ハ神も親の恩
 梅の福をい多く流し後敷
 冬に龍り梅穂の梅も喜く遊ハ

李友
 古登
 棋茶
 下手成
 夕ハ
 桂月

我新成身く更く春む山清水
地球撒り知まよ世の中り持
笑ひくやきく心見見牙く量
天くあるふま苦みのゆく届ま
故也登りあむ酒の徳
系柳むをほれを解く喜乃風

船橋
山笑
忍
三品
丸
茶舊

朝恩の卯く老のこを志がら
苗くらのゆへに長寿の翁料
降る雲く鶴飛松乃友を誓
老の杖中の氏神へ突き下り免
鶴笑る姿や苦みさ老の影
青茂海へ松もふ葉の老乃貌

まろり
榮丸
皆夢
赤志
古免
赤面

七癖のしるまも似し	宝	船	永	里
法被く鶴の除地く四季の花	真	園		
神鏡も期や極く春の月	舎	楽		
招島の手玉持地子伏山	莞	甫		
香の地一輪ま八地も根深の碑	玄	機		
家の高士流波持て父母地友分盤	成	福		

陽地を穰む新園へ出ま施行	一	歩
大鴨の心をりくハ餅く園	米	甫
信義を強く賭み合ふ名和書	八	光
春の香こころをりくハ餅く園	古	鉄
名く恥ぬ真言和の字修成	亞	園
鶴の師一通く老能書乃補業	松	苑

不筆成別加減其人
ゆぐ葉くま葉の音を括る
葉をせよ母のくまの松の純
尾をせよ方くまの松の純
一筆成二巡りくまの松の純
我公だ葉の長若葉和合

米人
加丸
一益
丸和
室子
全

此の花も時を志く松は咲く
葉の室拙き葉も若く生
長葉くまの葉の音五人
葉の掛くくまの松の純
己の愚を悟て松の純を
丸のくまの葉の音五人

全
葉
丸
丸
丸
丸

つゝ子の枝よき運ふ子此立舞の	父
肘曲すもも一歩在枝よき	於
是る木の夏れとふ返る花	氷
我もよき我がの枝よき枝よきの	赤
汝病とて養生をせよ親の身	歌
川原乃柳放れぬ枝	一
	老

悔ふ人の歳忽も身の子年	一
堪忍乃袋歳せん系柳	梅
恩を謝す汝も枝よき枝よきの	年
つゝはしとふ人の風之柳	雅
和ま富家の容儀吾々の金屏風	正
名聞はうゝぬ仁者枝よきの	楽
	眼

雪拂ふ園庭のほろも月の中
戸をぬき時代の恩恵を帯びて
親の心を知る五月雨を懐く
信あふく倦れぬ物を米の味
一致せよ水より氷冷たき程
花炎候し懐素の強し操の憂

キマリ
香七
花丸
飯
仁志花
和合

人言をばさすも柳乃心
玉孝の英しと出陣く酒も湧き
花子の妻也也指打るる今年
五湖へ舟あまの日和をよくと切り
儲け多しを自由の世は果報
解り物と福は長き御貴典

有人
義母子
真中
全
柳袋
全

玉の緒は流し付く冥世の鏡
伝ハ友酒造る水茶も合ハ
全 聖 舎

○

子く光り流りて出さるる月
甲府 三ツ輪

枝振りく話雅も目の付く雨舎
全 加子ぬ

世く長く輝くも赤心を磨きし
全 楽 調

補助

埴乃乃袋も後乃乃消盡
全 柳 志

柳の芽育ッが如く世乃進歩
左 雨 石

武浅志一小松ハ老て鶴の宿
武季 一 樹

老をまゐるの時も有る春輝の石
お原本 石

壽の短く心地柳の芽翠なり
全 南大星

切成り念遂け牙返るる水
上原 成 之

和らるる堅く糖縁もるる彫り
 花掩ふ袋あれうー鐘の奏
 博く孤あふ民並ふ碑も根縁不
 孝く孝かき孫賜至もお世目
 永世く栄誉も多れん柳の碑
 青子も凡の柳を志似振り

阿豆麻
 太
 五連
 約の家
 半醉
 誠

智愚ハ天性地々隔く水々管忍
 碑み如見風糖の道刻る魚
 籟身もたたりーたれん福縁
 愚を避けし煎く春ん柳の葉
 法のを依く一語事をもん蛇半
 子今柳のあり如みくくの義

仁志嘉
 和合
 六世甥
 葉山
 左
 嘉乐
 左
 雅柳
 左三男
 柳葉

餘り実意を我且しぬ若者を恥

全長男 歳 太

招乃若松友ありてくく業祭の碑

幹事 真 中

耐忍乃力の凝りれ痛柳

柳 袋

うつり引古車、我照せし此の後

吾 舎

○

老柳をま依母方の葦の風

六世 川 柳

待乳山の所より一の聲身萬代に傳へ黒土田川に

波の色千歳とよめる大津代は逢る幸ひは家

柳風の行くも事いふ人よ勝るをたれを三圍

をたれを世の碑は傍よおのまよまは染せよと社友の

すめりて一が白髪の色をまきひ初島を思はむ

るも恥づ一ふ業よまあれと初抱まらるるは

まのぬ然しと古きと人か友とら其てしよ四すよ

昔々——柳のまじりたる遠近の優人——ち富
士筑波の高き心は庭に隅曲の流るるはよ思ひ
成未の質跡を空りられ——を梅の塚の薫く
深く柳島の翠——なるを撰り頓て堤の櫻
木——のせむせむとら——は竹屋の渡——
直なる松竹代り逢ふあもよ——の幸なるをと嬉——
さの餘る個の寄海流を心を忘れ堀切の阿や

色あやなき根あり——を我ははる福諸天の厚
意を謝するもなむ

明治十五年の春 六世 小柳

應答の書

